

# ウィリアム・エラリー・チャニングの「自己修養論」

松 島 欣 哉 (教育学部教授)

## 1. はしがき

筆者は、香川大学で2年前から始まったネクストプログラム（特別教育プログラム）の一つ、「人間探求（文学作品熟読）プログラム」に関わっている。その導入となる授業は共通教育において週1回行われている。学生たちの自分の全体験と照らして文学を読もうとする態度に、筆者は少なからぬ新鮮な感銘を感じる。筆者は全学共通教育において、外国語（英語）の授業を担当しているが、残念ながらそのような感銘を受けることはない。コミュニケーションの道具としての言語習得に特化してしまっているからである。

数十年前の教養 vs. 実用論を蒸し返すつもりはないが、19世紀前半のアメリカのニューイングランドで大きな影響力を持った牧師の自己修養論が、今の日本の大学の教育課程に何らかのヒントを与えてくれるのではないかと期待して、ここに紹介する。

## 2. William Ellery Channing (1780–1842) 略伝

まず、ウィリアム・エラリー・チャニングの生涯を、彼の甥でありユニテリアン派の牧師でもあった William Henry Channing が纏めた *Memoir of William Ellery Channing* (1848)、ユニテリアン派の牧師 John White Chadwick の伝記 *William Ellery Channing: Minister of Religion* (1903) 等を参考に、略述しておく。

チャニングは、1780年4月7日、ロードアイランドのニューポートで、William Channing と Lucy Ellery との間に、第3子として生まれた。父のウィリアム・チャニングは、ロードアイランドの法務長官 (Attorney General)、ロードアイランドの連邦加入後は州法務長官 (District Attorney) を務めた法律家で、母方の祖父 William Ellery は、独立宣言に署名をした国会議員であった。彼の家系はいわゆる「由緒正しい」家柄である。

1794年の秋、エラリー・チャニングはハーヴァード大学に入学した。彼がのちの宗教思想を形成する上で大いに影響を及ぼしたのは、スコットランドのいわゆる常識派に属する哲学者たちであった。彼が学生時代において、道徳哲学者の Francis Hutcheson (1694-1746) と、同じくスコットランド啓蒙主義に属する哲学者・歴史家の Adam Ferguson (1723-1816) から多大な影響を受けたことを、ヘンリー・チャニングは以下のように説明している。

As Hutcheson was the medium of awakening within him the consciousness of an exhaustless tendency in the human soul to moral perfection, so Ferguson on *Civil Society* was the means of concentrating

his energies upon the thought of social progress. (W. H. Channing, 1848, 1: 33)

(ハチソンが、道徳上の完全性に向かう人間の魂の飽くなき傾向の意識をチャニングの内部に目覚ました媒介であったように、『市民社会』のファーガソンは、チャニングのエネルギーを社会進歩思想に集中させる手段となった<sup>1)</sup>。)

1798年エラリー・チャニングはハーヴァード大学を卒業し、ヴァージニア州リッチモンドで2年間、家庭教師をしながら宗教の研究に没頭した。このときおこなった過度の禁欲生活のため、彼は虚弱体質となった。1801年にハーヴァード大学に復学し牧師職につく勉強を重ねた彼は、1803年にフェデラル・ストリート教会 (Federal Street Church) の牧師に叙任された。この教会は、1729年に、ボストンの当時ロング・レイン (Long Lane) と呼ばれていた通りに、スコットランド系アイルランド人たちが設立した長老派 (Presbyterian) 教会で、のちに (1787年)、会衆教会制 (Congregationalism) を採用した<sup>2)</sup>。彼は終生この教会の牧師であったが、彼の影響は19世紀前半のニューイングランド地方に及び、彼の思想はのちの Ralph Waldo Emerson (1803-82) を中心とした超絶主義 / 超越主義 (Transcendentalism) 運動の母体となった。

### 3. ユニテリアニズムの表明

チャニングは19世紀前半のアメリカにおけるユニテリアニズムの「精神的指導者」(Roberson, 2010, 319) と称されるが、聖職を奉じた最初からユニテリアン派に属していたわけではなかった<sup>3)</sup>。聖職者としての生涯の当初1803年から1809年までの説教には、罪意識、人間性の墮落 (depravity)、悔い改めない罪人の墮地獄の危険といった、正統派カルヴァン主義の聞き慣れたテーマも含まれていた (Chadwick, 1903, 75)。その彼がユニテリアニズムを表明するのは、ニューイングランドの宗教史に残る大論争である「ユニテリアン論争 (Unitarian Controversy)」が始まって暫くしてからであった。

「ユニテリアン論争」は、1805年、ハーヴァード大学のホリス神学教授にカルヴァン派の神学者に代わり、進歩派の Henry Ware (1764-1845) が選ばれたことに端を発する<sup>4)</sup>。それから10年後の1815年、カルヴァン派の牧師 Jedidiah Morse (1761-1826) がイギリスのユニテリアン派創始者 Theophilus Lindsey (1723-1808) の伝記からアメリカのユニテリアニズムに関する章を抜き出し、この伝記の著者 Thomas Belsham (1750-1829) のソツィーニ派 (Socinian) の教義を掲載した序文とともにパンフレットにして出版し、ボストンの進歩的な牧師たちをユニテリアンであることを隠していると非難したのだった。ソツィーニ派は、イタリアの神学者 Fausto Sozzini (1539-1604) が創始した宗派で、イエスの神性や三位一体説を否定する教義を掲げる<sup>5)</sup>。

モースがパンフレットを出版した直後から「ユニテリアン論争」が本格的に始まった。このとき生来論争を嫌ったチャニングは、ユニテリアン派の友人 Samuel Cooper Thacher (1785-1818) に宛てた “A letter to the Rev. Samuel C. Thacher, on the aspersions contained in a late number of the Panoplist, on the ministers of Boston and the vicinity” (1815) を刊行し、そのなかで進歩派を排除しようとするカルヴァン派の態度を批判するに過ぎなかった (Chadwick, 1903, 132-35)。しかし、「ユニテリアン論争」が進むにつれ、カルヴァン派とユニテリアン派の牧師が同じ教会で説教をしていた慣習をカルヴァン派

が拒絶するようになって、チャニングは自分の信仰を告白したのである。

1819年、Jared Sparks (1789-1866) の叙任式でおこなった、のちに有名な「ボルティモアの説教」として知られることになる説教で、チャニングは、「私たちは、三位一体の教義に対し、言葉の上では神の単一性を認めているものの、結果的にはそれを覆すものとして、異を唱えます。」(“We object to the doctrine of the Trinity, that, whilst acknowledging in words, it subverts in effect, the unity of God.”) (“Unitarian Christianity” 371) と、公式の席で三位一体説を明確に否定した。

#### 4. 理性に基づく聖書解釈

「ユニテリアン派キリスト教」において、チャニングは書物を読むときの一般論から始める。

Now all books, and all conversation, require in the reader or hearer the constant exercise of reason; or their true import is only to be obtained by continual comparison and inference. Human language admits various interpretations; and every word and every sentence must be modified and explained according to the subject which is discussed, according to the purposes, feelings, circumstances, and principles of the writer, and according to the genius and idioms of the language which he uses. (“Unitarian Christianity” 368)

(すべての書物や会話は、読み手と聞き手に絶えず理性を働かせることを求めます。言い換えれば、その真の意味は、絶え間のない比較と推測によってしか獲得され得ないのです。人間の言語は様々な解釈を許します。一つ一つの単語や文章は、議論されている主題に応じて、書き手の目的・感情・環境および信念に応じて、そして、彼が用いる言語の本質と語法に応じて、修正され説明されなければならないのです。)

そして、聖書も普通の本と同じように、理性を働かせて読まなければならないと主張する。なぜなら、聖書の内部には「際限のない関連性 (infinite connexions)」(同) があるゆえに、「聖書以上に頻繁に理性を働かせることを要求する書物を知らない」(同) からである。そうすることによってしか、「文字のむこうの精神に目をやり、主題の本質と書き手の目的において彼の真の意味を探す」(同) という、聖書を理解する際のキリスト教徒に課された義務は果たせないからである。

チャニングは、カルヴァン派を念頭に置きながら、進歩的聖書解釈をおこなうユニテリアン派の理性の利用を非難する彼らが、その理性を不当に乱用して「不明瞭なことのために明らかなことを犠牲にして」(369) いる例として、「我々の最初の両親の堕落 (fall)」(同) と「神性についての不可思議な教義」(同) を挙げる。ここでチャニングは、このすぐ後で自分の立場を明確にしているように、カルヴァン派の基本的教義である原罪説に基づく人間の生まれながらの堕落 (depravity) と神の三位一体説とに異議を唱えているのである。

チャニングはまた、聖書に示された神の啓示に関する判断においても、「その真偽の大きな問題は神によって理性の審判の場 (the bar of reason) で決定されるよう委ねられている」(同) と、「我々の最高の能力」(同) である理性に全幅の信頼を置く。なぜなら、6年後の1825年におこなった自

己抑制 (Self-Denial) を主題にした説教で述べているように、人間の理性は「不完全ではあるが、それでも神の子 (“the offspring of God”）」 (“Self-Denial: First Discourse” 338) であり、「その真髄に、神の精神の栄光を構成する真実と廉潔 (truth and rectitude) という不変かつ不朽の原理を含んでいる」(同) からである。

しかしながら、チャニングはキリスト教の理解における理性の働きの重要性を公言することにおいて、聖職に就いた早い時期から積極的であったとは決して言えない。先述したように、彼は始めのころは、正統派カルヴァン主義の教義である、罪意識、人間性の墮落、悔い改めない罪人の墮地獄といったテーマで説教をしたのである。彼は子供のころ正統派カルヴァン派の教会に通っていたのでその教義がなかなか抜けなかったことがその大きな要因であろうが、別の要因として、彼がハーヴァード大学に入学した当時の学生たちの道徳的・宗教的心情に大きな影響を与える結果となったフランス革命と Thomas Paine (1737-1809) の *The Age of Reason* (1794, 1795, 1807) に、理性の働きの悪影響を見て取ったことがあるのではないかと考えられる。

チャニングは、1794年ハーヴァード大学に入学したときのことを振り返って、以下のように述べている。

College was never in a worse state than when I entered it. Society was passing through a most critical stage. The French Revolution had diseased the imagination and unsettled the understanding of men everywhere. The old foundations of social order, loyalty, tradition, habit, reverence for antiquity, were everywhere shaken, if not subverted. The authority of the past was gone. . . . The tone of books and conversation was presumptuous and daring. The tendency of all classes was to scepticism. . . . The state of morals among the students was anything but good. (W. H. Channing, 1: 60)

(大学は私が入学したとき以上に悪いときは一度もなかった。社会は極めて危機的段階を経ようとしていた。フランス革命は想像力を病に陥らせ、いたるところで人間の理解力を揺るがせた。社会秩序、忠誠心、伝統、慣習、往古に対する敬意といった古い基盤は、覆されたとは言わないが、いたるところで揺すぶられた。過去の権威はなくなってしまった。(中略) 書物や会話の調子は不遜で大胆不敵であった。あらゆる階級の傾向が懐疑主義に向かった。(中略) 学生の間品行は、とうてい良いなどというものではなかった。)

それから15年ほど後の1810年4月5日におこなった、ナポレオンの帝政を非難する説教において、チャニングは以下のように述べている。

The French Revolution was founded in infidelity, impiety, and atheism. This is the spirit of her chiefs, her most distinguished men; and this spirit she breathes, wherever she has influence. It is the most unhappy effect of French domination, that it degrades the human character to the lowest point. (W. E. Channing, 1: 333)

(フランス革命は不信心、不敬、そして無神論にその基礎を置いていました。これこそフランスの首謀者たち、最も傑出した者たちの精神なのです。そして、フランスは影響力のあるい

たるところで、この精神を吐き出しています。フランスの君臨の最も不幸な結果は、そのために人間性が最低限度まで貶められていることです。)

1810年は、ヨーロッパにおけるフランスの版図が最大になるころで、ナポレオンの勢力の絶頂期であった。チャニングはのちに(1827年)、ナポレオンの帝政を「軍事独裁制(military despotism)」(“Napoleon” 526)と呼んだ。理性に立脚した啓蒙思想から生まれたフランス革命の行き着いた先が、恐怖政治、戦乱、独裁制、道徳の紊乱、キリスト教の冒涇・無神論さらには教会・修道院の破壊であつてみれば、チャニングが理性を声高に唱導できないのは無理も無い。

また、チャニングがハーヴァード大学に入学した1794年は、キリスト教を冒涇したと見なされた Thomas Paine (1737-1809) の *The Age of Reason* 第一巻が出版されたときであつた<sup>6)</sup>。ペインの『理性の時代』は、18世紀イギリスの理神論(Deism)の流れを汲む主張を掲げるが、彼の主張は過激であつた。ペインは『理性の時代』において不遜で俗悪な言葉遣いでキリスト教の教会制度や教義を批判し、「牧師さえ否定出来ない証拠を提出し、その証拠から、聖書が神の言葉だと信頼される資格が無いことを示」したのだつた(Paine, 1938, 65-66)。そのために彼は無神論者として非難されたのだ<sup>7)</sup>。宗教界に巻き起こされた非難を顧みれば、理性を積極的に唱導するなら無神論者と見なされるという不安をチャニングが抱えていたと想像しても、的外れではなからう。

しかし、理性によるキリスト教理解は、ユニテリアニズムの根本的態度であつた。ユニテリアン派の牧師で歴史家でもあつた Earl Morse Wilbur (1866-1956) はユニテリアン主義の歴史を纏めた *Our Unitarian Heritage* (1925) において、ユニテリアニズムがその信仰の根本に、教会が掲げる教義の盲目的受容ではなく、教義や聖書に関して理性を以て対応しようとしたことを、「ユニテリアンはほぼ始めから宗教の自由の重要性を力強く強調し、宗教における理性の権利を主張した」(Ch. 2)と述べている。

大学時代の聖書の研究をとおり、チャニングは、神を怒れる神と観るカルヴァン派の教義である、人間の生まれながらの墮落説と救済の予定説は、神を正しく理解していないのではないかと、疑念を持つようになった。そして次第に神から与えられた人間性の中の理性に大きな意味を見いだしたのである。

こうして、チャニングは「ユニテリアン派キリスト教」において、「聖典の解釈において正当と認めがたく理性を利用する」(367)、「理性の位置を高め啓示の上に置く」(同)、あるいは「神の知恵より自分自身の知恵を好む」(同)といったカルヴァン派からの非難を、真っ向から否定したのであつた。

## 5. 「自己修養論」(“Self-Culture”)

チャニングの「自己修養論」について議論するにあたり、まず、彼が「ユニテリアン派キリスト教」において展開したイエスの解釈を理解しておかなければならない。

神と人間との仲立ちをする仲保者(mediator)としてのイエスの役割を、カルヴァン派を含め従来の教義は、イエスの死が神の人間に対する怒りを和らげることにあつたとする。それに対しチャニングは、「キリストの死は、神を宥めることのできるようにするあるいは慈悲深くする点で、つまり人間

に向かう神の優しさを目覚めさせる点で影響力があるとする考えを、我々は断固とした不賛成の気持ちを込めて拒絶します」(“Unitarian Christianity” 378) と否定し、以下のように主張する。

We earnestly maintain that Jesus, instead of calling forth, in any way or degree, the mercy of the Father, was sent by that mercy to be our Saviour; that he is nothing to the human race but what he is by God's appointment; that he communicates nothing but what God empowers him to bestow; that our Father in heaven is originally, essentially, and eternally placable, and disposed to forgive; and that his unborrowed, underived, and unchangeable love is the only fountain of what flows to us through his Son. (379)

(我々は本気で次のように主張します。イエスは、いかなる方法でもまた度合いにおいても、父の慈悲心と呼び覚ます代わりに、その慈悲心によって遣わされ我々の救世主となったのだと。イエスは人類にとって神による任命によって生じた彼自身の存在以外の何者でもない。イエスは神が彼に力を与えて授けるもの以外の何物も伝えはしないと。天にいる我々の父は、本来、本質的にまた永遠に宥めることができ、赦そうという気持ちでいるのだと。そして、借り物ではなく他に由来するのでもない神の不変の愛は、その子をとおして我々の許に流れ来るものの唯一の源なのだ。)

前述したように、チャニングは神と子と精霊の三位一体説を否定した。そして、彼は神の属性を、「怒れる神」ではなく、「完全なる善意 (perfect benevolence)」(376)、「善性と廉潔 (goodness and rectitude)」(378) と見なす。なぜなら、「我々は、神は、言葉の厳密な意味において、限りなく善良で親切で善意を持っている、と信じる」(同) からである。

また、彼は、神の神性 (Godhead) をただ神一人に認めたくて、イエスを「神に劣る (inferior to God)」(376) が、「キリスト教徒の唯一の主 (the only master of Christians)」(367) であるとした。なぜなら、イエスは聖書に書かれた神の啓示を生き、神の言葉を人間に与えることによって、神の教えを徹底的に生きたからだ。この点に、チャニングはイエスに「神の道徳的完全性 (moral perfection of God)」(376) を獲得しようとする聖なる存在を見いだしたのである。

チャニングにとってイエス・キリストの仲保者としての使命は、神を人間に和解させることではなく、人間を神に和解させること、つまり、「我々をある崇高な天にある徳に合わせて形成すること (to form us to a sublime and heavenly virtue)」(380) なのである。人間の生来の性質に「神との近似 (likeness to God)」(“Likeness to God” 291, ff.) を観るチャニングは、人間の性質の中に完全可能性 (perfectibility) を視ていると言えるのである。それゆえに、「神の道徳的完全性」に至ろうと生きたイエスは、人間が現世を生きる上でのモデルとなるのである。

チャニングの「自己修養論」は、「手仕事に従事している人々」(“Self-Culture” 12) を対象にしたフランクリン講演の導入として、1838年9月にボストンでおこなった講演を基にしている。講演自体は1回であったが、元々2回の講演を予定して準備していたので、それを1839年に出版したものである。

チャニングは、聴衆が労働者階級であることを念頭に置いて、まず「あらゆる人間に共通する性質」

(12) にこそ「偉大さ (grandeur)」（同）があると明言し、「あらゆる状態にあるあらゆる人間が偉大だ」（同）、「人間は、どこにしようと何であろうと、人間として偉大だ」（同）と、地位の上下や職業の貴賤を超えた人間の偉大さを宣言する。そして、「人格の偉大さは、もっぱら魂の力に、つまり、思考と道徳的信念と愛の力にあります。そしてこれは最もつましい生活状態のなかにすら見いだせるのです (Grandeur of character lies wholly in force of soul, that is, in the force of thought, moral principle, and love, and this may be found in the humblest condition of life.)」（13）、と付け加えた。

チャニングは、人間のみにも備わった自己探求力 (self-searching power) と自己形成力 (self-forming power) とによって、自己修養は可能だと説く。そして、「ほとんどの人間において気づかれていず使われてもいず眠っている」（15）後者の力を発見することが最も重要だと述べて、本題に入る。

チャニングの「自己修養論」は3部から構成されている。順番に見て行こう。

### (1) 自己修養とは何か

チャニングは、以下の7つの原理 (principle) を挙げる。

#### 1) 自己修養は道徳的である。

チャニングは、人間の内部に二つの原則を見出す。一つは自分ひとりの利害や満足や名声を求める。もう一方は、「偏りのない公正と全てにゆき渡る善意」（15）を実行しようとする「公平無私の (disinterested)」（同、ff.）原理である<sup>8)</sup>。後者の原則は、ときに「理性」、ときに「良心」、ときに「道徳感覚あるいは道徳能力 (moral sense or faculty)」（同）と呼ばれる、とチャニングは言う。そして、利己主義の原理と公平無私の原理とを明確に識別することが、自己探求によって得る自己認識の最も重要な点であるとする。

#### 2) 自己修養は宗教的である。

チャニングは人間の力のうちに、物質的創造物を認知する五感とは別の、「無限で自存の原因 (Infinite, Uncreated Cause)」（16）、「永遠の、全てを包含する精神 (Eternal, All-comprehending Mind)」（同）に至ろうとする力を認め、これを宗教的原理と呼ぶ。そして、宗教的自己修養は道徳的自己修養の完成であり最高度の現れであると言う。なぜなら、「偏りのない公正と全てにゆき渡る善意」を神の中に認め、それを崇敬することが「真の宗教の真髄」（同）だからである。

#### 3) 自己修養は知的である。

真実を獲得するために、知性を働かせ思考し、推論し、判断する力を人間は備えているが、自己修養を行う上で、この原理は「公平無私」の原理である道徳的原理より上に位置づけてはならないとチャニングは言う。そして、

Intellectual culture consists, not chiefly, as many are apt to think, in accumulating information, though this is important, but in building up a force of thought which may be turned at will on any subjects on which we are called to pass judgment. (17)

(知的修養は、多くの者が考えるように主に情報の収集にあるのではなく（それも重要ではありますが）、我々に批判するよう求められた如何なる話題に対しても、随意に向けることのできる思考力を築き上げることにあります。)

と、全体的判断力の涵養に知的自己修養の意義を見出すのである。

4) 自己修養は社会的である。

チャニングは、夫婦・親子・兄弟などの家族間の愛情を友人・隣人・国家へ展開することも、自己修養であると説く。

5) 自己修養は实际的である。

緊急事態、困難なとき、危険や試練に対して実行力のある行動を取ることを可能にさせるのも、自己修養である。

6) 自己修養は美的である。

チャニングは「美意識 (sense of beauty)」(18) を涵養することも、自己修養であると言う。美は自然や芸術作品や文学など、どのような生活状態のなかにも存在する。美意識の普及によって、少数の者に限られると思われて来た「優雅な満足」(19) を一般大衆も分ち持つことが出来る、とチャニングは言う。

7) 自己修養は自己表出である。

自己表出が自己修養でありうるのは、「我々は、自分の想念を他人に明らかにしようとする将にその努力によって、自分自身をよりよく理解し、また、その想念もより大切になる」(19) からである。また、チャニングは聴衆である労働者階級を特に意識し、「立派な人々 (respectable people)」の言語を話すように努めることによって、彼らの有する社会的便益に近づくことが可能となり、延いては、それが自己の向上に繋がる、と言う。

## (2) 自己修養の手段

チャニングは、まず、自己修養といった「偉大な目的」(20) は、堅い決意をもって「神が与えた諸力を最大限に利用」(同) しようとしなければ、達成は覚束ないと注意する。さらに、自己修養の手段は少数者のものと見なされる書物に限られると思われがちだが、「智慧の偉大な源」(同) である、自然や人々との交わりによって得られる「体験と観察」(同) は誰もが得られる、と一般に信じられている誤解を正す。そして、自己修養はその実現可能性を確信することから始まることを強調し、また、自己修養の目的は外的状況の改善ではなく、主に自己の内面の向上にあることを繰り返して、以下の8つの手段を挙げる。

### 1) 外的状況の改善

しかし、上記のように言ったすぐあとで、チャニングは「自分の境遇を改善する」(21) ことは自己修養の基礎となることを指摘し、まず外的状況の改善から始めることを勧める。さらに、「真の精神修養は俗事における向上にも叶っているから、それをこの目的に利用するのも当然です」(21-22) と付け加える。

### 2) 動物的欲求の抑制

労働者階級における飲酒の悪影響を熟知しているチャニングは、「酒精飲料」(22) あるいは「火酒」(同) を、この階級の「不倶戴天の (deadliest)」(同) 敵と呼ぶ。飲酒は理性や知性に損傷を与えたり、「無気力や獣的粗暴」(同) を引き起こすだけでなく、「個人の権利や社会秩序を侵す犯罪」(同) をも招くからである。チャニングは、聴衆に禁酒 (temperance) を呼びかける<sup>9)</sup>。

### 3) 読書による優れた知性との交流

書物は、それを誠実に利用する者には誰であろうと、人類の「最良の者と最も偉大な者との交流とその精神的存在感」(23) を与えてくれる。チャニングは *The Christian Examiner* の1830年1月号に“Remarks on National Literature”を掲載したとき、優れた知性が見いだした真実が書物を通し普通の人々に広がり、その結果「社会の進歩」が達成されることを力説した(126)。ここでは、自己修養は個人によって異なるから、選ぶべき書物は個々人の「心の自然の乾き」(“Self-Culture” 23) を満たすものが良く、「自己修養は個人の犠牲を命じてはいない」(同)と、個人に力点を置いた説明をおこなっている。チャニングは、これまで少数者に限られていた本が安く大量に出版され誰でも手にすることが出来ることに言及する。Bernard Smith はその *Forces in American Criticism* (1939) において、「文化の民主化 (democratization of culture) は、1825年から1850年の間の期間の、より注目に値する特徴の一つである」(57) と指摘して、中産階級への文化の浸透については、アメリカ文学や外国文学の詞華集や概要集を始めとする多数の書物の出版をその第一の原因に挙げている<sup>10)</sup>。

#### 4) 内面から湧き起こる啓示への固執

チャニングは周りの人間の意見に安易に同調しないよう警告する。彼は、「子供のような教えやすさ」(24) と、思慮深い判断力に照らして是認できない意見に対する「男らしい抵抗力」(同) とを備えねばならないと言う。そうして、日常で出会う以上の高次の感情や大志を感じたらそれに留意するよう説く。なぜなら、「それはあなたのなかでうごめく神性 (the Divinity)、つまり、真実や義務についての新しい (中略) 最も貴重な啓示であるかもしれない」(同) からである。チャニングは生まれ持った性質を完全に展開することが「神の目的」(同) だと信じる者は、ごくありふれた職に就く者であっても、「最も該博な哲学者」(同) 以上に「神の摂理の賢明な解釈者」(同) たりうる、と信じるのである。

#### 5) 職業への専心

自分が従事する職業において、最善を尽くそうとすることが、「自分の性質の完全化」(25) に資する、とチャニングは言う。ここには、プロテスタンティズムの根底にある労働倫理を肯定的に自己修養と結びつけようとする彼の姿勢が窺える。

#### 6) 艱難辛苦

人生に付きものの艱難辛苦は、神が送った自己修養の「崇高な (noble)」(26) 手段である、と牧師に相応しい説教も言う。チャニングは「ユニテリアン派キリスト教」において、「我々はこの世を教育の場と見ます。そこでは神が繁栄と逆境によって、援助と妨害によって、人間を教育しているのです」(“Unitarian Christianity” 377) と言っていた。

#### 7) 政治への参画

民主制下のアメリカでは、ヨーロッパの専制君主制とは違って、各個人が国内の問題から外交問題まで、重要な事柄について考え議論する機会があるから、「知性を活性化し、自分を越えたところへ目を向ける」(26) ことになるのがあるべき姿であるが、実際はそうになっていないとチャニングは言う。そして、その原因は政党の党派心に基づく政争にあるとした。1820年代～30年代のアメリカの政界は、大まかに言えば、それまで政権を取っていた民主共和党 (Democratic-Republican Party) が、一般民衆の人気を得た Andrew Jackson (1767-1845) が率いたグループ、John Quincy Adams (1767-1848) が率いたグループ、Henry Clay (1777-1852) が率いたグループ

などに分裂し、大統領の職をめぐる争った<sup>11)</sup>。その結果、ジャクソンが勝利し、いわゆるジャクソン流民主主義が幅を利かせることになるのは周知の通りである。貧者と富者とが相対立し中傷しあう状況を憂いて、チャニングは聴衆に「たくらみを持つ政治屋の道具」(29)にならず、アメリカの「政治と運命の真の影響力」(同)になるよう勧める。

#### 8) キリスト教

最後にチャニングは、キリスト教を、人間が造った教義ではなく「元々の記録」(30)、つまり聖書の文言から研究するとき、キリスト教が自己修養を助け促すことがわかると言う。チャニングにとって、自己修養とは人間が「神の道徳的完全性」に近づこうとする努力に他ならず、それを明確に示しているのは、聖書(主に新約聖書)でありそこに表現されたイエスの言動であるからだ。

## 6. むすび

以上、19世紀前半にアメリカの北東部で影響を与えたユニテリアン派の牧師、ウィリアム・エラリー・チャニングの生涯と彼の自己修養論を紹介した。チャニングの自己修養論は、教養教育論あるいは生涯学習論といってもいい。彼の自己修養論は、180年前の一牧師の道学者ぶった説教として顧みる価値はないと、はたして切って捨てられるだろうか。

昨今の大学の共通教育において、マルチメディア・リテラシー、コミュニケーションの道具としての外国語(特に英語)の習得が叫ばれて久しい。それはそれで結構だが、その目的が単なる知識・情報の収集に終止してはいないだろうか。教育は単に知識の習得に終わることなく、人格の陶冶に向かわなければ、その価値は半減する。ヘイトスピーチの横行や快樂のために他人の命を奪う事件といった、心の貧しさを示す時代である。チャニングの謂う道徳的原理から見た人格の陶冶と、第一言語による自己表現の涵養から見た自己修養という観点を始めとするいくつかの論点には、真の意味での教養・共通教育を考えるうえで、今こそ耳を傾ける価値があると考えられる。

## 付記

本論は、JSPS 科研費基盤研究(C) 課題番号 26370319 の助成による研究成果の一部である。

## 注

- 1) ファーガソンの『市民社会』とは、*An Essay on the History of Civil Society* (1767) のことである。
- 2) Cf. Rev. Kim K. Crawford Harvie, "A History of Arlington Street Church."
- 3) 1825年の6月、ハーヴァード大学神学部を最近出た牧師たちと彼らに同調する信者たちがチャニングのフェデラル・ストリート教会でアメリカ・ユニテリアン協会(American Unitarian Association)を立ち上げたとき、チャニングはそれに加わらなかった。Cf. Frank Carpenter, "William Ellery Channing."
- 4) ハーヴァード大学のホリス神学教授職は、イギリスの富裕な商人であった Thomas Hollis

(1659-1731) の寄付によって 1721 年に創設された。Cf. Colleen Walsh, “The oldest endowed professorship.”

なお、チャドウィックは 1815 年を「ユニテリアン論争」の始まりの年としている (115) が、1805 年を始まりとするのが一般的である。Cf. Earl Morse Wilbur, *Our Unitarian Heritage*. Ch. XXXV.

- 5) 三位一体説を否定する議論自体は、イエスの神性を否定した 4 世紀のアリウス主義 (Arianism) 以来、連綿と続く議論である。
- 6) このとき、ペインの『理性の時代』に反論した Richard Watson (1737-1816) の *An Apology for the Bible* がハーヴァード大学の学生全員に配布されたことを、チャニングの 1 学年上の同窓生であるセイレムの判事 Daniel Appleton White (1776-1861) がその回想記 *Memoir of Hon. Daniel Appleton White* (1863) のなかで証言している。Cf. *Memoir*, pp. 8-9.
- 7) アメリカの 32 代大統領 Franklin D. Roosevelt (1882-1945) が、ペインを「汚らわしいくだらぬ無神論者 (filthy little atheist)」と呼んだことはよく知られているが、ペイン自身は『理性の時代』の冒頭で、ただ「私は一人の神の存在を信じる、それだけだ。それに、現世のむこうにある幸せを願う。(中略) 私はユダヤ教会、ローマカトリック教会、ギリシア正教会、トルコ教会、プロテスタント教会、その他私の知るいかなる教会が公言する教義も信奉しない。私自身の心が私自身の教会だ」(Paine, 1-2) と宣言しているに過ぎない。ローズヴェルトがどのような機会にペインを「無神論者」と呼んだのかは定かではないが、大衆に人気があった大統領による、出版当時の教会側の言葉の単なる受け売りが、ペインの正しい評価を遅らせるのに貢献したであろうことは、十分察せられる。Cf. A. J. エイヤー『トマス・ペインー社会思想家の生涯』p. 230.
- 8) *The Peabody Sisters* の著者 Megan Marshall は、その序文において、「現在使われることがあるとしても常に誤用されている「公平無私」という言葉が、この [ピーボディ] 姉妹の手紙や日記では最高の称賛の言葉として何度も現れる」(xix) と書いている。「公平無私」という道徳的価値観は、19 世紀前半のボストンを中心とする知識階級の間で広くゆき渡っていた価値観ではなからうか。この点で牧師チャニングが果たした役割は、決して少なくはなからう。
- 9) 19 世紀前半は、様々な社会改革運動が始まった時期であるが、禁酒運動もその一つで、アメリカ禁酒協会 (American Temperance Society) がボストンで設立されたのは、1826 年のことであった。Cf.  
<http://www2.potsdam.edu/alcohol/files/American-Society-for-the-Promotion-of-Temperance.html#VKu8-L6Qvbg>
- 10) ただし、スミスは、この時期労働者階級にまで文化の民主化が行き渡った大きな原因は、労働団体の政治的活動に起因する無料の学校教育の普及と、チャニングのこの講演もそうであるが、一般大衆を対象にした講演会が盛んにおこなわれたことを挙げている (Smith, 59-61)。前者に関しては、チャニングも「自己修養論」の終わり近くで言及している (“Self-Culture” 30)。19 世紀前半に広まった文化会館 (lyceum) を中心とした講演活動に関しては、小野和人の『ソローとライシーアム』が詳しい (特に第 1 章)。
- 11) 1828 年の大統領選挙では、ジャクソン陣営とアダムズ陣営との間で激しい中傷合戦がおこなわれたことは有名である。Cf. John William Ward, *Andrew Jackson*, pp. 63-71.

## 参考文献

- エイヤー、A. J. (大熊昭信訳) (1990) 『トマス・ペインー社会思想家の生涯』 法政大学出版局
- 小野和人 (1997) 『ソローとライシアーアムーアメリカ・ルネサンス期の講演文化一』 開文社
- Carpenter, F. *William Ellery Channing*. Retrieved June 3, 2014, from  
<http://uodb.org/articles/williamellerychanning.html>.
- Channing, W. E. (2010). Likeness to God. In *The Works of William E. Channing, DD*. New and complete ed. 1877. (pp.291-302). Rpt. Whitefish, MT: Kessinger.
- \_\_\_\_\_. “Remarks on National Literature.” *The Works of William E. Channing, DD*. (pp.124-38).
- \_\_\_\_\_. “Remarks on the Life and Character of Napoleon Bonaparte.” *The Works of William E. Channing, DD*. (pp.522-59).
- \_\_\_\_\_. “Self-Culture.” *The Works of William E. Channing, DD*. (pp.12-36).
- \_\_\_\_\_. “Self-Denial: First Discourse.” *The Works of William E. Channing, DD*. (pp.336-43).
- \_\_\_\_\_. “Unitarian Christianity.” *The Works of William E. Channing, DD*. (pp.367-83).
- Channing, W. H., ed. (1848). *Memoir of William Ellery Channing: With Extracts from His Correspondence and Manuscripts*. 3 vols. Boston: Wm. Crosby and H. P. Nichols. Retrieved September 2, 2014, from  
<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.hwwuf6;view=1up;seq=13>,  
<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.hwwuf7;view=1up;seq=9>,  
<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.hwwuf8;view=1up;seq=17>.
- Harvie, Rev. K. K. C. *A History of Arlington Street Church*. Retrieved December 12, 2014, from  
<http://www.ascboston.org/about/history.html>.
- Marshall, M. (2005). *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Boston: Houghton Mifflin.
- Paine, T. (1938). *The Age of Reason*. 1794. Rpt. London: Watts.
- Roberson, S. L. (2010). Sermons. In J. Myerson, S. H. Petruionis & L. D. Walls (Eds.), *The Oxford Handbook of Transcendentalism*. (pp. 319-29). New York: Oxford UP.
- Smith, B. (1971). *Forces in American Criticism: A Study in the History of American Literary Thought*. 1939. Rpt. New York: Cooper Square Publishers.
- Walker, Rev. J., ed. (1863). *Memoir of Hon. Daniel Appleton White*. Boston: John Wilson and Son. Retrieved December 12, 2014, from  
<https://archive.org/stream/memoirhondaniel00walkgoog#page/n8/mode/2up>.
- Walsh, C. The oldest endowed professorship. Retrieved December 12, 2014, from  
<http://news.harvard.edu/gazette/story/2012/05/the-oldest-endowed-professorship/>.
- Ward, J. W. (1953). *Andrew Jackson: Symbol for an Age*. London: Oxford UP.
- Wilbur, E. M. (1925). *Our Unitarian Heritage: An Introduction to the History of the Unitarian Movement*. Boston: Beacon Press. Retrieved December 12, 2014, from  
<http://pacificuu.org/wilbur/ouh/>.